

講演概要

加藤 倫之（環境省屋久島自然保護官事務所）

『屋久島世界遺産 20 年の歩み～遺産登録の効果と残された課題』

- ・屋久島環境文化懇談会において、初めて屋久島を世界自然遺産にしたらどうかと言及された。それを受けて、懇談会の委員、鹿児島県、旧上屋久町と旧屋久町が政府に働きかけて、日本が世界遺産条約を受諾して、屋久島が遺産登録されたという経緯がある。
- ・屋久島の世界自然遺産地域は、屋久島の面積の約 21%を占めている。
- ・遺産登録された理由は大きく 2 つある。1 つ目は、顕著な普遍的価値が認められているため（原生的な天然林や際立った標高差による自然美と、高山を含む暖温帯地域の特異な残存植生が海岸線から山頂部まで連続して分布する生態系）。2 つ目は、認められた顕著な普遍的価値が日本の国内法（自然環境保全法、自然公園法、国有林野管理経営規定、文化財保護法等）によってしっかり保護されているため。
- ・遺産地域にかかわる行政機関で構成される屋久島世界遺産地域連絡会議（環境省九州地方環境事務所、林野庁九州森林管理局、鹿児島県、鹿児島県教育委員会、屋久島町）、順応的管理のための科学的知見に基づく助言を得るための屋久島世界遺産地域科学委員会があるが、行政機関と科学者が協働すれば遺産地域が管理できるというわけではなく、民間団体も入った屋久島の利用について議論する協議会があり、官民学の連携体制で遺産地域を管理する仕組みができています。
- ・遺産登録が地域に与えた影響について、まず、屋久島が有名になったという効果が挙げられる。有名になった屋久島を訪れる人の数も増えている。
- ・屋久島を訪れる人が増えることで、産業構造の変化も起こっている。第 3 次産業が成長している。主に観光客を相手にする小売業、飲食業、宿泊業に従事する人の数が 2000 年には第 1 次産業者、2005 年には第 2 次産業者の数を超えている。そうした中で、数の増え方が顕著なのがガイド事業者。
- ・観光産業の成長によってか、屋久島の人口減少率も抑えられている。
- ・遺産地域における施策は、まずは施設整備。1993 年に遺産登録されてから 2013 年まで、屋久島の山岳部でひっきりなしにトイレ、木道、デッキ、休憩所、避難小屋などの施設整備が続けられている。
- ・里地にも拠点施設を整備している。環境省では 1996 年から屋久島世界遺産センターを開設。鹿児島県では屋久島環境文化村センター、屋久島環境文化研修センターという 2 つの拠点を整備。屋久島町では、旧屋久町が平成元年から屋久杉自然館という博物館を整備し、1999 年にリニューアル。林野庁の拠点は無いが、屋久杉自然館における著銘木落枝等の展示に協力し、屋久杉自然館の大きな魅力の一つとして貢献。
- ・遺産地域における施策として、利用に関するいろいろな仕組みも導入している。例えば 2000 年からマイカー規制を導入し、今では 3 月から 11 月までマイカーが規制されてい

る。また、利用者負担の仕組みとして山岳部保全募金を導入し、し尿を山岳部に残さず里地で適正処理をする取り組みを行っている。

- ・利用にかかる取組みだけでなく、保全対策も実施しており、科学委員会の意見を踏まえて、地域連絡会議で屋久島世界遺産地域モニタリング計画を策定し、何年には何をやるということを決めて、順応的管理を行っている。
- ・遺産地域に残された課題としては、山岳部の利用に関する問題とヤクシカによる問題の2つがある。今回は、山岳部の利用に関する問題について紹介。
- ・山岳部の利用には、利用者の増加による影響、利用者のリスクの増大、施設の維持管理費の不足という3つの問題がある。
- ・1つ目の利用者の増加による影響については、生態系への影響と利用体験の質への影響の2つがある。
- ・2つ目の利用者のリスクの増大については、利用拠点である縄文杉登山や白谷雲水峡での遭難件数が増加しており、その理由が疲労・持病・食中毒である点が挙げられる。安易な気持ちでの入山や、自分の体力に見合わない場所への入山が遭難を招いている。
- ・3つ目の施設の維持管理費の不足については、2010年度以降し尿の搬出量が急増し、単年度赤字が継続している状態。
- ・問題の原因は何かと考えると、逆説的だが、1つの理由として、環境保全のための施設整備で利便性が向上したことが、観光客による山岳部の利用を増加させたことが考えられる。
- ・2004年度の調査によると、縄文杉登山に訪れる方の58%が普段は登山をしないという結果が出ている。それから登山者数はかなり増えているので、普段登山しない人の割合は58%より多くなっていると考えられる。
- ・山岳部の利用に関しては、まず観光客が増えて利用の影響が強まり、事故の発生が増え、それを抑えるために施設を整備し、保守点検の頻度を増やし、利用しやすくなって、また観光客が増えるという循環に陥っているのではないかと考えられる。
- ・屋久島の山岳部の利用に関しては、このサイクル、バランスをどう整えるかが大きな課題と考えている。
- ・残された課題としては4点。
- ・1点目は、どういった体験を通じて何を感じてもらいたいかが決定することが必要なのではということ。例えば比較的厳しい登山を通じて荘厳な自然美を体感してもらう、屋久島の山岳信仰を知り、自然に対する畏敬の念を感じながら人と自然の関係を考えてもらうなど、こういう体験でこういう感想、印象を持ってもらうということを屋久島で決定して、発信していく必要があると考えている。
- ・2点目は、利用体験の質を明確にすれば、それに応じた整備水準の設定ができるのではということ。誰もがアクセスできる場所はバリアフリー化を目指す一方、比較的厳しい登山を体験してもらう場所は装備や覚悟が必要な整備水準にとどめるなど、行き過ぎた整

備は止め、重要なところはしっかり整備するという施設整備のめりはりをしっかりつけていくことも大事だと考えている。

- 3点目は、観光客を登山者にする仕組みを導入することも必要なのではないかということ。観光客が登山の技術や山のことを知らないで入ってくるのが問題なので、登山の技術や山に対する考え方を学べる地域を目指していけばどうかと思う。例えばある程度きついところでは、事前のレクチャーの受講や一定の資格を有するガイドの同行を入山のルールにすることもあり得ると思う。
- 4点目は、受益者負担、利用者負担による遺産地域の保全管理。今屋久島で主に行われているのはトイレの維持管理だが、トイレだけではなく、山の中のパトロールや自然環境のモニタリング等にもコストはかかる。観光振興で得られた利益の一部を保全管理にかかるコストや環境保全に還元するという、本当の意味でのエコツーリズムの確立が求められているのではないかと思う。さらに、屋久島で今幾つかある募金制度の再編、募金方法の改善によって、入山者が協力しやすい募金にすることも必要だと思う。

中川 正二郎（宮之浦岳参り伝承会）
『屋久島・岳参りの復活』

屋久島は、ご存じのとおり山、海、川などすばらしい大自然が身の回りにいっぱいある。島の人は、自然のあらゆるところに神様がいて生活している。

山岳信仰は日本中にあるが、屋久島の場合は約 500 年前から伝わる集落行事であるということが特徴である。集落ごとにあがめる山があって、その頂には石の祠が祀られており、年に一度ないし二度代表者が登って集落の繁栄や安全を祈願する。

屋久島は大小合わせて 24 の集落があり、集落の目の前にある前岳という山の上に各集落の祠を祀っている。現在は、24 集落のうち 21 集落で岳参りが復活を果たした。

なぜ岳参りを復活させ、見直しているかということ、世界遺産登録後山のありさまが大きく変化したことが一因だといえる。屋久島は今有史以来最大の注目を浴びており、多くの人が山へ入るようになり、登山道の荒廃、し尿の問題などいろいろなことが起きた。一番心配しているのが事故・遭難の多発である。山とのかかわりが急激に濃厚になり、心配なこともありがたいこともあり、いろいろな思いがわき起こってきて、再び山の神様のことが気になり、みんなで話し合ったわけでもないが、やめていた各地区でもいつの間にか自然発生的に岳参りが復活した。それが全体的な復活の流れである。

一般の人が本来聖域である山にあまりにも気軽に入り過ぎて、山へのおそれや敬いの心、畏敬の念が欠如していることが、いろいろな問題を引き起こしているのではないかと気がついた。それが、岳参りを復活させるきっかけになった。浜砂を山の神へ届け、精霊が宿る花や木を持ち帰るのは、命の循環や山と人のつながりを表している。そのどちらが欠けても成立しないという意味で、砂とシャクナゲは岳参りの象徴である。

畏敬、感謝の気持ちが自然に対する心構えだと思う。これを失って山に登ると大変なことになる。人はついこういう気持ちを忘れてしまうので、岳参りはそれを忘れないための慣わしであると考えている。だから、あれだけきついことをみんなやる。

柴崎 茂光（国立歴史民俗博物館 准教授）
『世界遺産登録後の屋久島の利用動向』

アンケート調査

観光客の動向を把握するために、2011年から2012年の夏にかけて、屋久島の入込地点である屋久島空港・宮之浦港・安房港で対面式のアンケート調査を実施した。その結果、ヤクスギランド、ガジュマル園は利用者が減っていることが分かり、縄文杉、白谷雲水峡、いなか浜といった特定の観光地に利用が集中していることが分かった。

遠方の大都市からの女性を中心とした観光客が増えている。また、周遊型の団体客から屋久島滞在・個人客を中心とした観光にシフトしている。とりわけエコツアー客が増加していて、パッケージツアーとの関係が緊密になっている。観光客が特定の観光地に集中し、それがエコツアーで訪問する場所と合致している一方で、かつての団体客の主要な来訪場所への訪問者数は減少していることが分かった。また、入込数が2010年以降若干減り始めていることや、1人当たりの土産物購入代が減少していることもあって、里の価値が下がっているのが気になる。

屋久島のブランド化のあり方

里の暮らしに注目するのが重要だと思っている。屋久島の自然遺産が注目される一方で、文化的遺産が失われる可能性が生じているということを描きたい。観光につなげるかどうかは先の話だが、遺構だけではなく当時の生活の記憶をうまくつなげて、文化的遺産を記録していくことは重要ではないかと考えている。

地域づくりのあり方

島民、とりわけ観光業に従事していない若者も交えて、縄文杉、登山歩道はどういう空間であるべきか、里の川はどういう場所であるべきか議論することによって大方針を作った上で、具体的にどういう対応策を取るか議論していかないと、同じような問題が繰り返されるのではないかと思う。議論に時間はかかるけれどもじっくり意見をまとめていくしか最善の道はないのではないかというのが考えである。

研究者と行政の関係だが、従来型の権威づけするための委員会はやめたほうがいいと思う。例えばこれまで委員としてかかわっている屋久島世界遺産地域科学委員会では、世界遺産地域の拡大、管理方針の見直しを提案してきたが、諮問機関ではなく助言機関ということもあって、なかなか話が進んでいない。結果的に、管理計画を改定するためだけに設置された委員会になってしまっているのは非常に残念だと思う。これはやめて、真の意味での協働、すなわち計画段階からわれわれの意見のいいところをぜひもっと酌み取ってもらえるとありがたいと思う。

パネルディスカッション概要

『島外からみた世界遺産の島“屋久島”への期待』

- 土屋**：屋久島への期待は、保護地域管理論から言うと、屋久島は日本国内だけでなくアジアや世界的に見てもかなり管理が進んでいるところ。これから克服しなければいけない問題がいろいろ出てくると思うが、フロントランナーとしての屋久島をこれからもぜひ続けていっていただきたい。今日はそのための一歩ではないかと思う。
- 鯨本**：日本は島国で、日本の中には 6,852 個の島があります。その中で、有人離島が約 420 あり、屋久島は佐渡島、奄美大島、対馬の次に 4 番目に大きい島。いろいろな島に携わっているが、もともとは編集者という立場で地域情報誌、ビジネス誌、広告を作っていた。たまたま縁があって 3 年前から離島に特化しており、そういう視点から屋久島を見ている。屋久島が日本で最初に世界自然遺産になり、最近では小笠原諸島が世界自然遺産になったが、今後は奄美大島、徳之島、西表島、沖縄の山原が次に世界遺産になるのではないかとされているので、そういうところを牽引する意味で、フロントランナーとしていろいろと動いてもらいたいと思う。
- 寺崎**：屋久島は山の色が濃くて山の畏怖、厳しさを感じたことがある。機会があつておとしに、念願だった縄文杉ルートを雪の中行くことができ、先月末には 1 週間ぐらい屋久島の山の中を存分に歩くことができた。いろいろなところを見て回るとすごいところだと分かってきた。20 年たつて普通の観光地になったという印象がある。そういう意味では、観光屋の目線で言うと、今は大きな曲がり角に来ているのではないかという感じがする。
- 神谷**：屋久島には遺産認定前の 80 年代後半に何度かお邪魔して、山に登ったりサルを見に行ったりしていた。今は人が多そうで嫌だという印象があり、人が多そうで行きたくないし、2~3 回行ったからほかに行きたい山もあるという感じで、10 年以上屋久島にはお邪魔していない。しかし、島という独特の環境、場所には非常に大きな期待を持っている。少なくとも屋久島で解決できない課題はどこでも解決できないのではないかと思う。よくも悪くもブランドの島になっている屋久島で山、自然、地元の生活が守られないようであれば、どこの日本の山でも守られないと思う。トップランナーとして期待するところはすごく大きい。
- 荒木**：観光関連産業は飛躍的に発展し、地域経済に大きな効果をもたらした。一方、縄文杉を中心とする山岳部への一極集中が進み、貴重な自然環境に負荷がかかり過ぎているという指摘を受けている。屋久島のために、自然環境の保全と利活用という相反する 2 つのテーマをいかに融合させるか今問われていると思う。地元自

治体として取り組んだ環境保全対策として、縄文杉への一極集中から登山者の分散化を図っている。また、質の高い認定ガイド制度を確立して、環境保全のためのルールを正しくレクチャーしてもらうような工夫にも取り組もうとしている。

古来より山岳信仰が盛んなこの島の人々は、山に対して畏敬の念を持って生きてきた。先人たちが苦勞して運んだであろう祠に祈りを捧げると、自然と厳かな気持ちになる。岳参りを通じ、屋久島の山、森、自然は世界に誇れるすばらしい財産であると改めて実感するとともに、花山のすばらしい屋久杉原生林の巨木の森や、屋久島のいたるところにある杉など、今ある自然をきちんと保護、保全し、後世に残すことが我々の責任だという思いをますます強くした。今までの20年もきちんと検証し、さらにこれから20年をどうしていくか関係者と話をし、自然だけが豊かになるのではなくて、そこに暮らす1万4,000人の生活も豊かになるような屋久島を目指して頑張っていきたいと思う。

中川：私は神様のことで来たが、先ほどから岳参りと神様の話ばかりで、屋久島があまり神懸かりになるのもいかがかと思う。というのは、それを感じて屋久島に来て、山の中に観音様や山ほど束にした写経など変なものを置いていく人もいて、ほとんど困っている。あがめていただくのはありがたいが、そういうのはぜひやめていただきたい。旧暦の9月16日は屋久島では山の神の日といい、山に入つてはいけない日、旧の正月、5月、9月の16日の大潮の日には山仕事をしないというのが昔からの慣わしで、今でも林業の方は山に入らない。地元の人の中には、これはちゃんと守るべきだ、昔から入らないのに何で入っているのだと主張する人もたくさんいる。

柴崎：実際に暮らしたのは7~8カ月だが、外から見た屋久島と中で生活しながら見た屋久島は随分違うという印象を持った。暮らしてみると、当時は世界遺産だとは全く意識しなかったが、世界遺産という枠組みが人々の生活にだんだん影響を与えている。具体的には、山に自由に行こうと思っても荒川登山口に関してはシャトルバス制度が導入されているし、岳参りの際にも警察署に許可をもらって一般の地元の車が山に上がっていくのが掟。そういうものに非常に違和感を感じている。

保護地域に指定されたことが果たしてよかったのか悪かったのか考えつつ、できれば地元の人視点に少しでも寄り添いながら、いい案を出せたらという立場で今は研究している。

土屋：ありがとうございました。今回のシンポジウムでは、先ほどの3つのご報告でも事実の紹介と同時に問題点、課題を指摘していただきましたし、自己紹介でも既に問題点や見方の違いがたくさん出ています。初めに山岳部の問題です。

中川：安全面というか遭難関係が気になるところで、奥岳方面には素人が単独で入山するのは禁止したほうが良いと前から言っています。登山の経験も少ない人があまりにも軽々しく行ってしまつて、そのままいなくなつてしまいます。登山経験が

豊富な方も、状況が一変すると道を誤ります。本当に難しいところなので、あまり軽々に入るのはいかがかと私は思います。また、マナー面に関しては、法律に訴えるよりも心に訴えるほうが早いと思います。そういう意味でも、山の神様を信じて、畏敬の念を持ってもらうことで、おのずとマナーがよくなると考えます。

神谷：シカ、登山道など課題は明確で、そういう言葉を山と溪谷社は登山者には伝えられますが、観光客に伝えるのはJTBや宿泊地かもしれないので、外も中も含めて取り巻くプレーヤー1人1人が屋久島や山のことを思い、伝えていけるようになることが重要だと思います。

寺崎：利用者のニーズ、レベルに合わせた整備のあり方、利用のルール、案内の仕方を島全体でどう分けして作り上げていくか、その重要性を今回改めて感じました。

資源の状態、利用者の満足、意識の問題、観光を中心とした経済の問題と、岳参りの中でもよく出てくる地域の方々が観光現象に対してどう考えているのか、自分はその決定にどう関与していきたいのかという4つの視点(1つ目は自然資源、人文資源の状態に関すること。2つ目は利用者目線で、観光客が満足して、続けて来てもらわなければいけないし、せっかくだいい自然の中に人を入れるので、それなりの効果があるべき。3つ目は観光産業を中心とした社会経済、地域経済への波及という視点。もう一つは住民目線、観光に関するコミュニティの意思)から客観的、科学的にデータを分析して、平場で今後の内容を考えていくことが山岳部の利用でも大いに重要なのではないかと考えています。

柴崎：視点が違うかもしれませんが、世界遺産の島屋久島が観光利用だけでいいのかというのが非常に気になっています。みんなが観光を自発的にやりたいのか、それしか手段がなくなっているのか考えなければいけません。

歴史、文化をもう一回見直していき、その結果として地元の人や子供たちが文化的な資源に関心を持ち、さらに観光客が来るという仕掛け作りも必要なのではないのでしょうか。観光業に特化するということは、それが失敗したときに非常に危険なダメージを食らいます。

土屋：遺産というブランドは山岳部の利用だけ、もしくは観光業だけではなくほかにも使いようがあり、例えば第1次産業の振興もあり得るのではないかとこのものでした。つまり、島全体として世界遺産的なものを使った地域振興と、もともとの財産である環境の保全という2つをどう調和させるかということになると思います。これはすごく難しい問題です。

鯨本：人も含めて自然のあり方を考えていく必要があると思います。今は、世界自然遺産のインパクトでいろいろな方がやってきたことにより、島が新しいバランスに変わろうとしているので、これから先の未来のバランスを考えていかなければいけないところだと思います。バランスを考えると軸が絶対に必要なので、もともと島にある精神性、信仰、人の気持ち、自然のポテンシャルを軸にして、そ

のバランスを屋久島の人と外の人と一緒に考えていけばいいのではないかと思います。

荒木：20周年を契機に、皆さんが言われたことを十分理解して、もう一遍立ち止まって自分たちの島のことを自分たちの目線、身の丈できちんと考えなければいけないと思います。島で暮らす1万4,000人の意識の改革が非常に問題です。今観光産業が伸びてきて、5~6割の人がそれに携わっているかもしれませんが、1次産業をないがしろにするつもりは全くありません。むしろ、限界集落にならず生き延びていくには、山岳部に集中する登山客を里に下ろして、そこに住んでいる人たちが自分たちの集落に誇りを持って里のエコツアーをして、各集落で地域のそれぞれに特色を持った24集落の歴史や文化にも触れてもらうことが、島全体の活性化につながるのではないかと思います。

中川：観光客は明らかに減っていて、5年前が40万人で、おそらく去年、今年は30万人を切っているのです。この5年間で一気に25%、10万人ぐらい減りました。屋久島の経済を成り立たせるには観光客は今の人数より多くていいと思いますが、シーズンに集中してしまうと大変なので、もう少し分散されればいいと思います。

外部からいろいろな考えが入ってこない、地元の発想だけでは先には進みません。よその人はいろいろな考えを持っていて、中にはついていけないような話もありますが、外の見聞も重要だと思います。

神谷：時間がかかると思います。しかし、ちょっとでもいろいろな魅力を発信することで、つまり、10ページの屋久島特集のうち2ページは岳参りや滝のことを載せるよう配慮することで、ゆっくりイメージが広がっていくし、その魅力でリピーターになったときの利用の分散化や、新しいイメージができると思います。

寺崎：島にかかわっている方々が自分たちの島の観光やそれ以外のことも含めてどうしていくかという基本的な考え方を共有しないと、先ほど言ったような外圧ではないですが、さらに無秩序に展開していく可能性がすごく強いと思うので、ぜひ国内での先例となるような取り組みをお願いします。島の観光を考えることが、島だけではなく日本国内で大きな役割を担っているというプライドを持っていただけると、僕の仕事からすると非常にうれしいと思います。

鯨本：情報の作り方を考え、屋久島が世の中でどういう言い方で人に伝わっているかチェックしなければいけないと思います。これから世界自然遺産になるような、人がたくさん来るだろう、話題になるだろうというところに関しては、情報デザインをどうしていくか考えたほうがいいということは、全然違う視点ですが補足したいと思います。

柴崎：観光だけではない島の魅力を提供することで、入山規制という形ではなく、多くの人が山に行かなくても里に滞在して楽しめて、結果的として山も、より静かな雰囲気、空間になると思います。

原体験をしておいたほうが、より島人らしい屋久島のあり方を提言できる。長い目で見たときには、地域作りには教育が欠かせないと思いました。

土屋：今日は基調報告を含めていろいろな視点でお話をいただきましたが、屋久島の持つ多様性が非常に出ていたと思います。今は山岳部の縄文杉を中心とした観光利用だけに集中してしまっていますが、実際に屋久島が持つ魅力、もともとのあり方はかなり多様なものがあって、観光資源という面以外に、いろいろな産業や、岳参りのように一番上のほうから海にまで至るさまざまな文化があります。皆さんが強調されていたように、多様性をもう一度みんなで共有し、理解し合って、話し合いをしながら方向性を決めていくべきで、おそらく今が決めるときなのではないかというのは大体皆さん一致していると思います。その中では、山岳部のゾーニングもこれから具体的なものとして見えてこないといけないのではないかと思います。